

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第9回会合 議事概要

1. 開催日時
令和6年12月25日(水)13時15分～15時15分
2. 開催場所
気象庁7階会議室1(ウェブ会議併用)
3. 出席者
別紙のとおり
4. 議題及び検討結果の概要
下記の議題について検討を行った。

○線状降水帯の予測精度向上に向けた取組の進捗状況について

- 防災支援を目的とした情報の対象領域の絞り込みは重要な取組である一方で、更なる予測精度の向上が必要であることを認識した。報告にあったとおり、観測データの高度利用や数値予報モデルの改良等は非常に重要であり、着実に進めていただきたい。
- 今年度の線状降水帯の予測が難しかった要因について、気象庁では個別事例の解析や統計的な観点で検証を行っていることが、数値予報資料共有 Web フォーラムでの共有を含めて確認できた。今後は、組織化された対流系等の線状降水帯の特徴を包括的に調査するとともに環境場の予測特性も考慮するなど、学官連携により事例検証の深堀を進め、具体的な改善策を検討することが重要である。この際、検証で得られた観測データの有用性に関する知見等は適宜共有しつつ、海洋上の観測(例:船舶観測、航空機による機動観測等)の有効性についても学官連携で調査研究を進めると良い。
- 令和7年度末の局地モデル(LFM)の高解像度(1km)化は非常に重要であり、着実に進めて頂きたい。その際には、高解像度化だけで精度向上が保証されるわけではない点に留意し、開発を進めてもらいたい。
- 東北・北陸地方の線状降水帯予測の改善に向け、線状降水帯発生6条件について、地域別に異なる閾値を設定することも検討すると良いだろう。

○線状降水帯の予測精度向上に向けた学官連携の方策について

- 予測精度向上のためには学官連携が極めて重要であり、機構解明研究における事例解析等、気象庁主導で大学や研究機関と連携した取組を推進することは非常に意義深い。学官連携による事例解析等をより深化させるため、必要となる各種データや数値予報モデルの利用等の更なる充実について検討してもらいたい。また、気象庁の地方官署での調

査研究結果の共有や異常気象分析検討会との情報共有も積極的に進めると良い。

- 線状降水帯の発生形態に関する分類に関連して、今年度に東北・北陸地方で発生した線状降水帯事例は、台風の遠隔で発生したとみなせる事例であったと考えられる。今後、台風の遠隔影響といった観点でも評価できると良い。
- 線状降水帯の機構解明に関する研究会では、事例解析に特化した議論を行うなどポイントを絞った議論を行うことが有効である。また、対面を含む開催形式や海外の大雨事例に関する情報共有についても検討すると良い。

以上

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第9回会合 出席者

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ 委員（有識者）

○ 佐藤 正樹	東京大学大気海洋研究所海洋地球システム研究系 教授
伊藤 耕介	京都大学防災研究所 准教授
伊藤 純至	東北大学理学研究科地球物理学専攻 准教授
川村 隆一	九州大学理学研究院地球惑星科学部門 教授
清水 慎吾	防災科学技術研究所 主任研究員
出世 ゆかり	防災科学技術研究所 主任研究員
竹見 哲也	京都大学防災研究所 教授
坪木 和久	名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授

（○：主査、敬称略、主査以外は五十音順）

気象庁出席者

石田 純一	総務部参事官（技術）
佐藤 芳昭	情報基盤部数値予報課長
別所 康太郎	情報基盤部気象衛星課長
杉本 悟史	大気海洋部予報課長
藤田 匡	気象研究所研究連携戦略官